

ラオス競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係： ヴィエンチャンの事例から

A Relationship between Tradition and Sports in Boat Racing Festival in Laos: The Case Study in Vientiane

橋本 彩 (Sayaka Hashimoto) 指導：蔵持 不三也

本研究は、ラオス人民民主共和国（以下、ラオス）の首都ヴィエンチャンにおいて雨季明けに開催される水の神と関わる民俗宗教的年中行事、競漕祭をとりあげ、その歴史を文献とフィールドワークを元に再構成した上で、2000年の前後に競漕祭に生じた伝統論争を分析し、伝統の語りをラオスの近代化に伴う文化問題として論じることを目的としている。

全体は、「はじめに」と「おわりに」を含め、9つの章から成る。

「はじめに」において問題意識を述べたのち、第1章「先行研究」では、アジアに広がる競漕祭の研究およびヴィエンチャン競漕祭をめぐるこれまでの諸研究を検討し、伝統論争の分析に関連する問題点を指摘している。その問題点の中心となるのは、ヴィエンチャン競漕祭の本性性をめぐる問題である。ラオス競漕祭の最も重要で最もまとまった研究は、フランス人民族学者であるシャルル・アルシャンボー (Charles Archaimbault) が1972年に出版した『ラオスにおける舟競漕：ある文化複合 *La course de pirogues au Laos : Un complexe culturel*』(Ascona:Artibus Assiae) である。この書の中でアルシャンボーは、ラオスの3つの王国（北部ルアンパバーン、中部ヴィエンチャン、南部チャムパーサク）に伝承される王室儀礼競漕を比較考察し、それらが水神ナーガの季節的移動（稲田が水を必要とする雨季にナーガはメコン川を離れて田に移り、稲が実り、水を不要とする乾季にメコン川へ戻るとする季節的移動）を促し、稲作のための水量を調整する儀礼であったことを明らかにした。こうしたアルシャンボーのシンボリズム解釈は高い評価が与えられ、これまでラオス競漕研究はアルシャンボーを起点とするのが一般的であった。しかし、本研究では、アルシャンボーが描き出したヴィエンチャン競漕祭はどこまでヴィエンチャン王国時代のものであったのか、その本性性を問うところから始めている。

第2章「調査地ヴィエンチャンの概略」では、競漕祭を実施するラオスの首都ヴィエンチャンの歴史とその特異性について述べている。第7章の伝統論争が示すように、ヴィエンチャン競漕祭は単に首都の競漕祭に留まらず、政府が主催するラオス国全体のイベントという意義を持っている。ヴィエンチャンは、14世紀にメコン川上流のルアンパ

バーンに都したラーンサーン王国が16世紀に遷都した都市で、17世紀にはルアンパバーン、ヴィエンチャン、チャムパーサクの3王国鼎立状態が生じ、ここにヴィエンチャン王国が出現する。その後、ヴィエンチャン王国は18世紀末には隣国シャム（現タイ王国）の属国となり、さらに19世紀の20年代には、ヴィエンチャン王国の国王であったアナがシャムに反旗を翻したものの、逆に捉えられて処刑されたことを契機に、シャムによる徹底的な破壊を受けて廃墟と化した。その状態は1893年のフランス植民地開始時点まで続く。3王都の中で唯一廃墟と化したヴィエンチャンの復興は、当地を首都と定めたフランス人によるものであるが、本研究にとって重要なことは、1940年代にフランス政府がタイの軍事進攻に対抗するためにラオス人のアイデンティティ教育に着手し、ラオス伝統文化の復興運動を展開したことである。古くから知識層に伝わる年行事の書『12の儀礼』が民間に広く喧伝されたのは、その例であるが、その書に旧暦第11月の慣習として競漕祭が記されていた。ここに競漕祭は伝統（パペニー）のお墨付きを得ることになり、のちに発生するヴィエンチャン競漕祭の伝統論争へと繋がっていく。

第3章「フランス植民地時代（1893年から1945年）」では、政府のプロパガンダとして機能するラオ語初の新聞ラオ・ニヤイにおいて、競漕祭が伝統と愛国心を結び付ける場として報道される例をとりあげ、政府が展開する伝統文化復興運動の具体相を記述している。また、この時期、これとは別に、フランス本国におけるヴィシー政権の「国民は国難に備え常日頃スポーツによってからだを鍛え、またスポーツによって国民統合をめざすべき」との政策に影響を受け、西洋由来のスポーツ（キッラー）振興が始まっており、伝統行事にスポーツが随伴する現象が頻繁に見られ、伝統とスポーツが同一時空間に並存する形が確認されている。しかし、ヴィエンチャン競漕祭の中で「スポーツ」が鼓舞された様子はなく、競漕もキッラーとは呼ばれない。むしろ競漕祭は、文化的な祭りとしてラオス人のアイデンティティを喚起する伝統復興の一部であり、パペニーであることが重視されたと言える。

第4章「ラオス王国独立後の競漕祭(1953年から1965年)」では、アルシャンボーが描くヴィエンチャン競漕祭の本源

性について、彼の調査前後の諸史料を比較し、再検討している。その結果、アルシャンボーが観察したヴィエンチャン競漕祭儀礼にはフランス人入植後の創造にかかる部分が多く見られると共に、北部ルアンパバーン王国の影響が濃厚に認められた。創造され、ルアンパバーン王国の影響を受けた競漕祭の中心を担う儀礼は、1974年まで競漕祭において繰り返される中で、「学識ある伝統」ならびに「学識者内で伝わる伝統」として、競漕祭の「伝統的」側面を形づくっていく。また、1960年代後半から1970年代前半にかけて、ルアンパバーンから皇太子夫妻が競漕祭に参列することにより、競漕祭の伝統は更に権威付けされていくこととなった。

第5章「内戦下の競漕祭（1965年から1974年）」では、王国政府と実質的なラオス国独立を目指すパテート・ラオの間で内戦が繰り広げられた時代の競漕祭を記述している。政情不安にあっても、王室が統治戦略として祭りに積極的に関与したことにより、競漕祭はそれまで以上に盛大におこなわれた。そしてアメリカが防共対策として1950年代から実施した膨大な資金援助によって、首都ヴィエンチャンに外国人が急増した結果、競漕祭は外の目を意識した変容を迫られる。祭りにつきものであった豊穰予祝の性的歌謡は後進性・前近代性の証しとして禁止する旨の通達がこの時期しばしば発せられたのである。政府は競漕祭を国内のイベントに留めるのではなく、世界にラオスを発信する外交文化戦略と位置付け、国際的にも認められる、誇れる文化とするため、標準化を推し進めていく。競漕祭の伝統とは、かつてあったままのものでなく、「正しく改善」され、世界を意識して再構成されたものを意味するようになる。他方、ヴィエンチャンに居住する外国人が競漕に参加する状況もこの時期の特徴である。また、50人が乗る従来の長い舟以外に1968年に8人が乗る手軽な短い舟（ファ・カーブまたはファ・キッラー）が登場したことも手伝って競漕は人気を博し、人々に土着文化と無縁のスポーツ意識を醸成し、「スポーツ競漕（キッラー・スワン・ファ）」「伝統スポーツ（キッラー・パペニー）」の新語を造語させた。1971年の新聞が「競漕祭。スポーツ競漕は年中行事における伝統スポーツである」の見出しで報道するに至り、ここに伝統論争の膳立てが整ったと言える。

第6章「ラオス人民民主共和国の成立からラオス観光年まで（1975年から1999年）」では、今日に続く社会主義国家体制下における競漕祭の変容を記述している。新政府の伝統文化に対する政策変更として特徴的であるのは、宗教関

連の祭典や儀式が社会主義発展の妨げとして禁止された点にある。競漕祭も、例外なく新政府の政策変更直面し、水神ナーガや諸精霊の儀礼は禁じられたものの、競漕自体は社会主義的生産活動と国民団結に有用な行事であるとの合理化の下に実施が認められた。旧政権である王国政府時代は競漕をスポーツとみる文化が広がりつつあったが、新政府はその文化をさらに一歩進め、「競漕は私たちラオス国民のスポーツ競技の一つである」と政府方針を伝える新聞にて宣言する。競漕祭は社会主義的新解釈の下に盛行を続け、1976年以後はバレーボール、セパタクロ、ボクシング、バドミントン、サッカーなどの競技会を伴い、さらに競漕祭の競漕（短舟種目）が国家スポーツ競技会の種目となり、ひいては、同類種目で東南アジア競技会に参加するなど国際化を始める。競漕祭はこのようにスポーツを強調する形で進行するが、1990年代に政府が外国人観光客の誘致に乗り出し、ラオス固有の文化を見直す傾向が強まると、これに呼応して、1998年には短舟種目が廃止され、祭りの名称も「伝統競漕祭」となっていた。

第7章「21世紀のワット・チャン競漕祭：伝統論争とそのゆくえ」では、2000年前後におこった伝統論争の様相を記述している。論争は伝統の回帰といった論調で展開されたものの、その中心は競漕祭の元来の核である水神ナーガへの儀礼を回復させるといった次元のものではなく、競技の公正性担保をめぐるものであった。1990年代よりヴィエンチャン競漕祭に舳と艫を尖らせた軽量かつ快速の舟がタイ（多くは東北タイ）の影響を受けて出現し、船首と船尾に水牛の角をおもわせるニェームと呼ぶ巨大な装飾をつけたラオス伝来の舟を抑えて常勝しはじめたことが、参加者の不満となり、論争が加熱していったのである。タイに影響を受けた舟が常勝する現実を契機に、敗北をラオス文化の劣性と読み替え、タイ文化からいかにラオス文化を守るかの文脈で伝統論争は展開したものの、参加する村落の地理的状況や国家スポーツ局と競漕祭の関係性などが複雑に絡み合い、最終的にはタイの影響を受けた舟の全面排除ではなく、ファ・スード（スポーツに特化した舟）部門と伝統舟（ファ・パペニー）部門を設定する現実的解決策が選択され、現在に至っていることを明らかにした。

「おわりに」では、それまでの論述を問題設定に沿って簡潔にまとめ、ヴィエンチャン競漕祭における過去から現在までの「伝統」と「スポーツ」の関係性について述べている。